

「邦楽ワークショップ」授業での実践紹介: 箏による《ソーラン節》の音楽づくりを例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉原, 佐知子, Yoshihara, Sachiko メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/2221

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



「邦楽ワークショップ」授業での実践紹介

―箏による《ソーラン節》の音楽づくりを例として―

A practical report on “Traditional Japanese Music Workshop”
: As an example of Music Making using Koto based on 《Sorani-bushi》

吉 原 佐知子
Yoshihara Sachiko

1 はじめに

1-1 「邦楽ワークショップ」とは

「邦楽ワークショップ」とは洗足学園音楽大学の2年生以上の全科対象の授業として、洗足学園音楽大学に現代邦楽コースが設置された2005年より開講された授業の名称である。

そもそも「ワークショップ」とは一般的には参加者の主体性を重視した体験型の講座、グループ学習、研修という意味である。そして、この「邦楽ワークショップ」は、邦楽器を使って参加者全員でその場で様々な題材（楽曲、調絃、奏法、音楽構造など）を用いて音楽をつくる活動である。

「邦楽ワークショップ」はもともと現代邦楽研究所（三味線奏者、西潟昭子が創設した私立研究機関）が邦楽の演奏家を育成するためのカリキュラムのひとつとして音楽教育学、特に音楽づくりを専門とする坪能由紀子を講師に迎えてはじまったものである。現代邦楽研究所では、邦楽の演奏家が邦楽器による活動を学校や社会的な場で展開することを目的として、1995年の設立当初から音楽づくりが取り入れられ、様々な活動が行なわれてきた。（坪能 2001:147）前述の通り、2005年に洗足学園音楽大学に設立された「現代邦楽コース」でも、「邦楽ワークショップ」は現代邦楽研究所での活動を礎としながら、授業のひとつとして開講されている。その授業の目的は、一方では「邦楽器と邦楽の語法を用いて音楽づくりを行い邦楽や邦楽の語法に親しむこと」であり、他方では「音楽づくりを通して、邦楽自体の新たな可能性を開拓すること」である。この授業は邦楽を専門とする学生だけでなく、全科対象となっているため、授業において学生達は時には邦楽器だけでなく各々の専攻楽器を持ち寄って音楽活動をすることもあり、お互い切磋琢磨しながら邦楽器と自分の専攻分野の両方の音楽を体験し、さらにはそれぞれが融合した新たな世界へと広がっていくことができる。音楽づくりの素材としては、伝統的な曲や奏法、調絃などをそのまま使うことにはじまり、そこから一定の音楽的な要素を抽出し、それをもとに新たな音楽づくりへとつなげていく。

そしてまた、音楽づくりという活動が一定の音楽構造をもとに行われているために、授業は現代音楽やジャズなどの諸様式及びその混合様式を視野に入れた発展的な活動にも広がっていくのである。

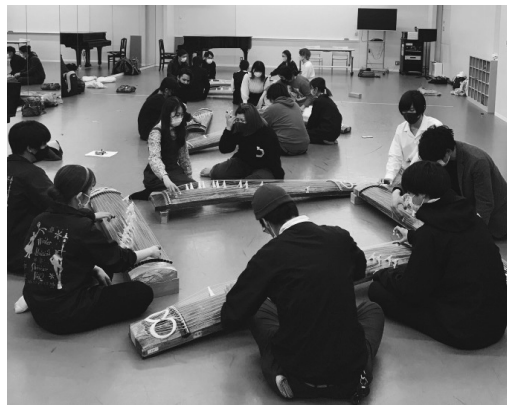
(吉原 2013:53)

邦楽ワークショップは2021年度現在、味府美香（音楽教育）、山口賢治（尺八）、市川香里（三味線）、筆者（箏）の4人が交替で担当して授業を行っている。筆者は2005年度より「邦楽ワークショップ」担当教員の一人として主に箏を用いた授業にかかわってきた。（写真1）

また、開講当時から授業の様子をブログにアップしていて、様々な手法を用いて邦楽器による音楽づくりを紹介している¹⁾。

今回は今までの邦楽ワークショップの中で《ソーラン節》を題材にしたワークショップを例にあげ、箏を使った音楽づくりワークショップの流れや手立てを紹介しつつ、今後の授業に役立てられればと思う。

写真1 授業風景 1人～2人で1面の箏を使用



1-2 研究の目的

邦楽ワークショップは、前述のように、1995年度より現代邦楽研究所において坪能により実践されてきた邦楽器による音楽づくりの活動をベースにしている。本研究では邦楽ワークショップのこれまでの経緯を俯瞰しつつ、主に箏による音楽づくりに着目し、今回は実践例として《ソーラン節》を教材としたワークショップを例に挙げ、箏を使った音楽づくりワークショップの基本的な流れを紹介する。この基本の流れを参考にし、この他の授業でもこの流れに沿って、調絃や題材や音楽構造などを変えて実践すれば、千差万別な箏の音楽づくりワークショップが出来るであろう。箏を使った音楽づくりをする上で、折に触れこの研究ノートが今後の授業の参考になると共に、今後の授業の改善や新たな授業実践の糸口になることを目的とする。

2 《ソーラン節》による音楽づくり実践例

2-1 題材について

今回のテーマである《ソーラン節》は、古くから北海道の日本海沿岸に伝わる民謡で、学習指導案にも音楽の学習で五音音階に親しむための教材として用いられ、運動会や音楽会でもたびたび登場する、

日本人にとっては馴染みの深い音楽である。

また、《ソーラン節》は前述にあるように五音音階なので、箏をその構成音で調絃すれば簡単にメロディを弾くことが出来、節づくり、即興なども、どの音を弾いても違和感なく馴染むため、容易に音楽づくりが出来る。学生には前述のように日本人としてなじみ深い《ソーラン節》に親しみながら、五音音階の良さや、箏の音楽づくりに五音音階を取り入れると簡単に音楽づくりが出来るという事を、実際に箏を使って音楽づくりをすることによって実感してほしい。

2-2 箏の準備について

それでは《ソーラン節》を例に箏による音楽づくりの実践例を具体的に提示する。

まずは、箏に柱を立てて、調絃をする。箏は柱を立てて初めて音が出る。箏柱を立てる位置によって音が変わるため、調絃は自由自在に変更可能であり、それは箏の大きな特徴のひとつである。それ故に使いたい音だけで調絃すれば、邪魔になる音がなくなるため、音楽づくりも容易である。

箏の準備については、箏柱の立て方や調絃の方法や具体的な弾き方などを、洗足学園音楽大学伝統デジタルライブラリーで詳しく説明している²⁾。

2-3 調絃の設定

今回は民謡音階（箏の楽調子に近い）を使用した。（楽譜1、写真2）箏は調絃が自由自在であるので、その種類は無限である。

《ソーラン節》は五音音階のひとつ民謡音階（ミソラドレ）である。そこで箏の調絃を「ミソラドレミソラ」（楽調子から一絃を1音上げた調絃）にした。この時、なるべくラ（主音）とミ（第五音）がたくさん入るように調絃を設定すると、伴奏や即興が作りやすい。また、箏柱の配置もなるべく中央にきたほうが楽器もよく響く。

楽譜1 《ソーラン節》調絃



写真2 柱並び



2-4 《ソーラン節》の音楽づくりワークショップの手順

① メロディを練習しよう

まず五線譜のメロディの下に絃番号をふって練習する。(楽譜 2)

親指、人差し指、中指に爪を付けて、中指は親指の3、4本先に添えておき、親指はしっかり次の糸に爪が止まるように下向きに弾くとよい音が出る。(写真 3)

ここでは全曲のメロディを載せているが、《ソーラン節》の一部が弾ければ音楽づくりが出来るため、無理して全部のメロディを弾く必要はない。最初の1行だけ弾くことが出来れば、充分音楽づくりが出来る。最初とは限らず、どこか気に入ったフレーズだけ練習してそれをベースに音楽づくりをしてみよう。

写真 3 爪の当て方



楽譜 2 《ソーラン節》主旋律

ソーラン節

ハ ハ 九 斗 斗 ハ ハ 七 ハ
ハ ハ 九 斗 斗 ハ ハ 七 ハ
ヤー レ ソ ラ ソ ラ ソ ラ
セ ハ 九 斗 斗 九 斗 斗 九 斗 七
ハ ラ ソ ラ
ハ 九 セ ハ ハ
お と こ ど き ょ う は こ せ き の か ら だ ー
斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗
ド ン と の り だ せ な み の ー う え
六 七 六 七 八 十 九 十 斗 九 十 九 八 七
チ ョ イ ヤ サ エ ー エ ン ヤ ー サ ー ノ
ハ セ セ ハ 九 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗 斗
ド ッ コ イ シ ョ
ハ ハ ハ

② 色々な特殊奏法を練習しよう

箏は右手に3つの爪を付けて、左手も押したり、ピチカートをしったりと、様々な奏法がある。(表1) 音楽づくりでは、この様々な奏法を取り入れることにより、多彩な音色や音楽的な表現の幅も広がるのでとても重要である。授業では以下の表にあるような、学生がすぐできる技をピックアップして教えるのだが、いつも学生はお気に入りの技を使って、音楽づくりに自由自在に取り入れてくれる。

表1 箏の奏法 唱歌と弾き方の一覧表 (叶こみち作成 吉原佐知子監修)

コロリン 隣接する3音の下降	シャシャ(テン) (割り爪) 人差し指・中指の順で ひっかく	シャン (かき下) 隣接する2音を中指で かくように
シャン、チャン (合わせ爪) 親指と中指(または人さし指) の爪で2本の弦を同時に弾く	シュツ (輪連) 爪の横で、する	ツルツル、ルン (すくい爪) 親指の爪の裏側で弦を 下からすくう
ツウ (あと押し) 弾いた直後にその弦を左手で 押して余韻を上げる	カーラリン (流し爪) 親指で手前から向こうへ グリッサンド	シャーンリン (引連) 中指で向こうから手前へ グリッサンド

③ 独自の奏法をつくってみよう

これは邦楽ワークショップ独特の活動で、既存の奏法以外で、箏から派生できる独自の特殊奏法を探してもらって、各々が発見した技を発表しあう。その奏法を自分たちの音楽づくりで取り入れることにより、音色の変化や音楽性も深まり、オリジナリティあふれる自分たちの音楽がつくれる。

学生たちは毎回、箏を使って色々なところをこする、たたく、はじく、などなど、私が思いつかないような素晴らしく独創的な音を発見してくれて、箏の可能性がどんどん膨らむのである。

④ 前奏をつくってみよう

五音音階で調絃されているで、絃を自由に行ったり来たりしながら弾いて最後を主音（この場合はラ）で締めくくれば、簡単に前奏らしいまとまりのあるメロディが出来る。

例えば、

- ・箏が5面用意できれば3名くらいが自由にトレモロを演奏している上に、他の2名が創作した旋律をつなげてみる。(楽譜3)
- ・②や③で練習した奏法もどんどん取り入れて、それぞれが考えた繰り返しパターンや奏法を重ねてみる。

五

楽譜3 前奏例

フリーリズム (拍子にとらわれず自由に)

⑤ 伴奏をつくってみよう

②で習った特殊奏法を取り入れながら、簡単なパターンをつくってそれを反復するだけで伴奏が出来る。さらにパターンをいくつかつくって、それを重ねると、それぞれは簡単なことをしていても豪華な伴奏が出来上がる。以下にパターン例を示す。(楽譜4,5)

楽譜4 パターン例その1

楽譜5 パターン例その2

⑥ メロディを作ってみよう

前奏でも触れたが、五音音階では弦を行ったり来たりするだけでメロディが作れる。たとえば、《ソーラン節》の1部分だけを伴奏パターンとして繰り返している上で、独自のメロディを重ねてみる。

⑦ 合いの手を入れてみよう

さらにメロディを盛り上げるための合いの手も加えてみよう。

合いの手のアイデアは次のようなものが考えられる。

ア) 箏の下を左手でたたいて打楽器のようにはやし立てる。

イ) フレーズの最後にグリッサンドを入れる。

ウ) 節に合わせて、後押し、打ち爪、散らし爪、独自に考えた奏法などの特殊奏法を入れる。

⑧ 対話してみよう

《ソーラン節》の繰り返しパターンの上で、箏でおしゃべりしてみよう。五音音階で調絃されているので、どの音を弾いても違和感なく出来る。実践では以下のように声掛けしている。

- ア) 相手の真似をしてみる。
- イ) 相手のフレーズや技を少し変化させて答えてみる。
- ウ) 自分で発見した独自の奏法や音を披露してみる。

⑨ 終わり方を考えよう。

終わり方の例として

- ア) リーダーの合図で決めておいたフレーズや特殊奏法で終わる。
- イ) 段々音を小さくして終わる。
- ウ) 誰かの掛け声で最後の決め技をして終わる。

⑩ 独自の《ソーラン節》を演奏してみよう

ここから①から⑨を組み合わせて3名から5名くらいのグループに別れて、1曲のオリジナル《ソーラン節》を演奏する。

例として

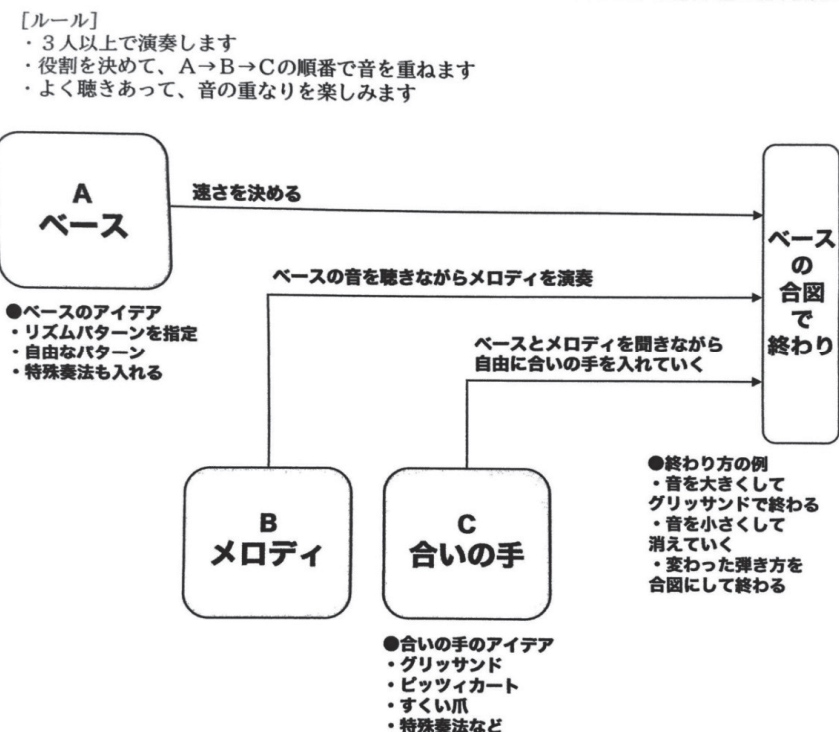
- ア) 前奏は2人くらいのソロで回し、メロディや伴奏、合いの手の入れ方は臨機応変に決めていく。
- イ) 《ソーラン節》の冒頭のみを繰り返しパターンとして、あとは独自のメロディをつくったり、対話したりしてみる。
- ウ) ベースのリズムや速さを変化させて、それに合わせて音楽を変化させてみる。

上記のように担当する組み合わせ（ベース、メロディ、合いの手）を変えてその日のオリジナル《ソーラン節》を楽しもう。伴奏パターン（ベース）を担当した学生がリズムや曲の雰囲気や左右するので、リーダー的な役割になる。最後は予め終わり方を決めておくとすっきり終わる。

箏は五音音階で調絃されているので、どの絃を弾いてもきれいに合うので間違いはない。怖がらず試しに色々な奏法やフレーズを弾いてみよう。まわりの音を良く聴くことだけがルールなので、よく聴き合って自在に音を重ねてみよう。

まずは以下の表のように、ベース、メロディ、合いの手、と役割を決めて、音を重ねてみるとやり易い。(表2)

表2 音楽づくりの実践例の表



⑪ 発表と講評

作った作品の発表の後は必ず感想を言い合うようにしている。それによって発表者もそれを聴いた学生も音楽を構造的に聴くことが出来、それぞれの音楽性の向上にも役立つ。

2-5 《ソーラン節》の音楽づくりの実践と分析

以下に過去2回の《ソーラン節》による音楽づくりワークショップの内容を提示する。この動画は学生によるオリジナル作品発表の様子であり、その展開と学生が工夫した点について分析する。

(1) <https://youtu.be/3PJZOFkNjYY> (2017年7月実施)

【作品発表と分析】

	展開	分析 (学生の工夫した点)
1	前奏として一人ずつ音まわし	
2	ゆったりとした《ソーラン節》の短いパターン	メロディ、対旋律、合いの手を重ねる。 ベースの音を段々下げていく。合いの手で後押しを入れて音色の変化をさせている。
3	間奏	ソロで独自のメロディを披露
4	速度の変化1	速い《ソーラン節》の短いパターンの上でノリのよいパターンを重ねて音数も増やしつつ音量も上げ、曲の盛り上がりをつくる。
5	速度の変化2	ゆったりとした《ソーラン節》のベースに戻り、また一人ずつ音回しをして静かに終わる。

(2) <https://youtu.be/Orqau0S1CTE> (2021 年 6 月実施)

【作品発表と分析】

	展開	分析（学生の工夫した点）
1	リーダーが《ソーラン節》のフレーズを絡めながらベースを担当	
2	リーダーのゆったりとしたベース	2名ずつ対話をし、他はそれに合わせて自由に合いの手（すり爪、合わせ爪など）を入れる。
3	リーダーのベースを段々早く	リーダーのベースの変化に伴いみんな音数や音量を上げつつ、色々な奏法を披露（合わせ爪、龍角をグリッサンド、無調音をグリッサンド、柱の頭をたたくなどの独自の奏法など）
4	だんだん強く（強弱の変化1）	リーダーのグリッサンドで盛り上がる
5	だんだん弱く（強弱の変化2）	一人ずつフェードアウトして終わる

(3) 曲の考察と今後の課題

どちらの動画も《ソーラン節》の一部分を繰り返して、その上で自由にメロディや飾りを自由に重ねている。前奏や終わり方もそれぞれオリジナリティにあふれている。動画の学生はほとんどが箏は専門外の初心者なので、各々は簡単なことをしているはずなのに、音を重ねることによってとても立派な音楽になっていることが分かる。

(1) の動画は音楽構造が A-B-A となっており、ベースやメロディの担当も場面ごとにチェンジしている、音楽の盛り上がりもあり、様々な奏法も使いつつ、しっかり考えてつくられている。(2) の動画は最初から最後まで1人のベースの音にあわせて速さや盛り上がりもつくられている。こちらは奏法をそれぞれ工夫しており、独自の奏法や習った奏法を自在に試しつつ音楽をつくっていることが分かる。

(1) のほうが音楽の構造がしっかりしている。それに比べて (2) は流れに乗って自由につくっており、即興性が高い。

いずれもベースにソーラン節のフレーズが流れているので違和感なく音楽づくりが出来ている。

このように容易に音楽づくりが出来る故に、フィーリングのみで音楽づくりをしてしまう場面がこの回に限らず、他のワークショップにおいても多々みられる。

今後の課題としては、即興的につくることと、構造をしっかり考えてつくること、どちらも大事であることを理解した上で、もう少し構造を考えて音楽づくりに取り組んでもらいたい。こちらからも、つくっている過程で学生がフィーリングに偏りがちな時はこちらから声掛けしてもっと音楽的につくるように導いて行こうと思う。

構造的に音楽をつくれるようにするためには、お互いの作品を聴いたら、良いところや工夫しているところを述べあって、音楽を客観的に分析することが大事である。良いところは次回からの各自の音楽づくりにも取り入れていく。そうすることによって音楽を構造的に聴く力や自分自身の音楽づくりのスキル向上に役立つであろう。

3 まとめ

このように、五音音階でテーマが簡単に弾けるものを題材にすると、学生が初心者であっても、工夫次第でそれぞれは平易であるのに、良く聴き合い音を重ねることにより、厚みのある素敵な作品が出来るということが分かる。

また題材であるソーラン節の一部がパターンとして常に音楽を支えているので統一感が出て、その上でどのような音を重ねても違和感なく聞こえる。よって伴奏パターンはとても大事であると再認識した。

学生自身もそれを実感していて、五音音階では簡単に音楽がつくれることや、支える繰り返しパターンの重要性を実感し、その上で自身の作った音楽を構築し、結果、自分の音楽が思った以上に表現出来るため、毎回達成感を感じているようである。

また、この音楽づくりの活動で培ったスキルが、学生各々の聴く耳や、音楽の構成力、音楽性の向上などに繋がり、最終的には自身の専門の音楽分野にも役立ち、学生ひとりひとりの成長の一端になってくれると嬉しい。

注

- 1) 邦楽ワークショップブログ：ソーラン節 2021 (senzoku.ac.jp)
- 2) 伝統音楽デジタルライブラリー：箏」(https://www.senzoku-online.jp/TMDL/j/01-koto.html)
- 3) 邦楽ワークショップブログ：ソーラン節 2021 (senzoku.ac.jp)

引用・参考文献

坪能由紀子 2001「邦楽器で音楽をつくる～音による新しいコミュニケーションをもとめて」現代邦楽研究所編
／西潟昭子監修「日本音楽のちから」音楽之友社 135-147

吉原佐知子 2013「音楽づくりにみる箏の教材化の可能性について」『洗足論叢』第42号 53-64

インターネット資料に関してはすべて 2021 年 8 月アクセス伝統音楽デジタルライブラリー：箏」
(https://www.senzoku-online.jp/TMDL/j/01-koto.html)

実践例 1 https://youtu.be/3PJZOFkNjYY

実践例 2 https://youtu.be/Orqau0S1CTE

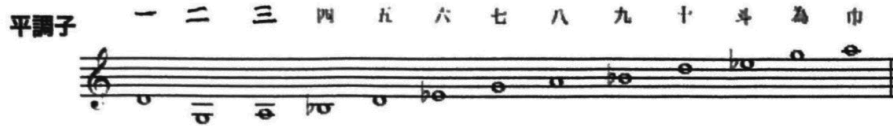
資料 色々な調絃

以下に邦楽ワークショップで今まで使われてきたその他の箏の調絃の一部を紹介する。

この表の他にも、12 音音階、教会旋法、全音音階、世界各国の伝統的な音階などもある。

色々な箏の調絃

第一弦をDにした場合



◎第一弦はオクターブ下にすることもある。第五弦から陰律(都節)音階になる。



◎第二弦から陽旋で、楽箏の律旋にあたる。

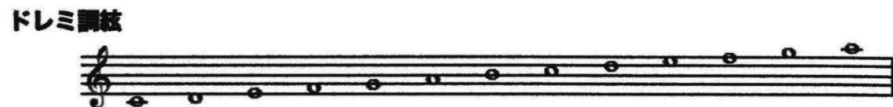


◎名称は近年のものだが、同様の調絃は楽箏(呂旋)や筑紫箏にもある。

◎第五弦から陽旋になる。沖縄では本調子と呼び、段物の調絃としている。



◎沖縄ではこの調絃を「四弦上げ」と呼んでいる。



◎♭や♯は曲によりつける